372

特253
950

科學と宗教の一致

始

例言

本編は昭和十二年六月十九日徳島市議事堂に於て開催の徳島市神道各教派聯盟主催第一回宗教講演會に於て我黒住教河本正二先生の講演の速記を印刷したものである。

特253
950

科學と宗教の一致

河本正一

（一）

只今御紹介を戴きました黒住教の河本でございます。恰度一昨年この席で各宗聯合講演會に於きましても一場の御話しをする光榮を得たのでありますが、又今回茲に德島市を始め附近の賢明なる方々の前に「科學と宗教の一致」と云ふ問題に就きまして暫らく御清聽を煩はす次第であります。

（二）

申す迄もなく近來文化が大變進みまして、學問が非常に發達を遂げまして、特に科學的方面の學問の進歩は何人も驚くべきものがあるのであります。處が兎もすれば、この科學と

宗教といふものが相對立し、相容れざるものなるかの如き觀を呈することがあるのであります。科學專攻の人々は宗教等と云ふものは、てんで迷信だと斯う云ふ風な考へをしてゐる人も多くある樣であります。同時に我々宗教の方面から申しますと、一部の人の中には科學といふと何か大變嫌なもので、これを嫌惡し、嫌ふといふ傾向もあるのであります。併し私はこの二つのものは共に人類の文化の最も尊い兩面を現はしてゐるものであつて相對立し、相反撥し合ふべきものでなく、兩々相手を提へて、そして人類の文化を彌が上に高く深くし、そして人類の幸福を愈々益々大ならしむべき最も尊いものであると確信してゐるのであります。

であります から科學を難じ、或は反駁し、科學を敵とする樣な宗教はほんとの宗教ではないと信ずるのであります。又同時に宗教を理解せず、全然精神的の部門を閑却しまして信仰と云ふことを少しも考へない樣な科學であり、然う云ふ科學者であるならば、これも亦氣の毒な誠に淺薄極まる人であると言ひ得ると思ふのであります。

(三)

宗教の方で如何に科學を惡く言つて見ても、「論より證據」と云ふことがあります。今日の科學は大變に進步してをりまして、古人が唯夢に見てをりました空を飛ぶと云ふことでも、自由自在にやつてゐるので、古人の夢は夢でなくなつた、既に先般日本の飛行機がパリー、ロンドンの方に迄少しの時間で飛び——百時間以內で行きましたが、これは現實の問題であります。世界中の者が見て、その進步を驚嘆してゐるのであります。最近新聞を見ますと、今度東京で開かれます二千六百年のオリンピック大會迄に、ドイツの飛行界に於いては、ベルリン、東京間を十五時間で飛ぶと云ふ計畫を樹て、今着々準備をし、研究を進めてゐるといふことであります。御承知の通り五万呎以上の成層圏と云ふその上に出ますと、空氣の抵抗が極めて微弱であつて、そこを飛べば十五時間で到着することが出來ると云ふのであります。これも恐らく實現しませう。單なる學說ではなく、目下着々實際に準備され、事實となつて來てゐるのであります。

水の中を自由自在に潜ると云ふことも、人類の一つの夢でありましたが、これも潜水艇が段々發達しまして、も少しこれが進歩しましたら、ほんとうに深い海底を自由自在に潜ると云ふことも可能でありませう。

昔雷様と言つて恐れられたその雷を捉まへて電燈をともす、夜も煌々と晝をあざむく明光を發してゐる。然かもこれが五燭光の球を持つて行けば、決つて五燭光の光りを出す、十燭光の球を持つて行けば十燭光の光りを出す、百燭なら百燭の光りを出す、きちんと一分一厘も違はんやうにその光りを示すのである。斯ういふ科學の現實の前に、どんなに威張つて見てもそれを否定し、そんなことは間違ひだとは言へないのであります。

この上多々益々科學は進歩すると思ひます。これは誠に結構なことで、然うなつて良い、そして人類の幸福を段々増進して行くべきであります。だから私は科學者を大變尊敬し、そして科學の前に心からの敬意を表するものであります。

併し、されば科學全能、科學万能、科學のみで良いかと申しますと、如何に科學が進歩

しましても發達しましても、どうしてもそれ丈けでは行けないものがあるのであります。

勿論未だ今日の科學は進歩發達したと言ひましても、未だほんの一小部分のものでありまして、昨日迄科學上眞理と言はれましたものが、今日は間違ひであつたと、ヨリ進んだ發見が發表されてをります。そして段々と進んで來てをるのでありますが、兎も角現在の科學に一切の權威を認めると云ふことは大きな間違ひであります。

而も今後如何に科學が進歩發達しましても、斷じてそれのみでは判らないものがある、それのみでは滿足し得られないものがあるのであります。茲に宗教の權威と云ふものを認めなければならないのであります。――「精神」の力、「生命」の神秘と云ふものは、科學の分析的研究であります。對象と成り得ないものであります。……それはどうしても超科學的のもの

（四）

元東京帝國大學教授で、寺田寅彦と云ふ人がありました。一流の理學者でありますが、

この人の研究に「砂の崩れ方に就いて」「椿の花の落ち方に就いて」「藤の實の割れ方に就いて」と云ふ様な研究があると言ふことであります。私は勿論その方面は素人でありますから、その論文を讀んだのではありませんが、その題から想像して、又他の人の話しを聽いたのでありますが、どんなものかと云ふと、此處に砂が盛つてある、そしてその砂がずつと崩れて行く、これにも科學的にキチンと一定の方式がある、我々素人の考へとしては、そんなことは何んでもない、唯偶然に出來た樣でありますが、そこに動かすべからざる一定の方式があるといふのであります。

椿の花が枝を離れてぼたりと落ちる、その落ちるのは地球の引力に依るので、ニュートンが既に發見してをりますが、それのみでなく、その落ち方に些細に調べると、一定の掟があり、方式がある。藤の實の割れ方にも一定の方式があると言はれてゐる。

なぜ科學者がこんなことに於いて研究するのであるか、そのことをどう考へて良いかと申しますと、天地の万象に就いて、凡ゆる事物に就いて、總ての事柄に就きまして、必らず一定の、微塵も狂はない掟がある、方式が存する。――こゝ迄考へて來ましたら、そこに我々にはつきりと「神」と云ふものが現はれて來なければならぬ。何人が然ういふ掟を拵らへたのであるか、國家は法律を拵らへてをります。その法に觸れた者を制壓します、處が何人も知らない前に、チャンと砂の崩れ方、椿の花の落ち方に就いて嚴乎たる一定の方式が存すると云ふことを考へます時に、この天地を支配なさる大きな御力があるといふことを考へなければならぬと思ふのであります。

古人が歌に詠んでをります。毎年毎年春が來ますと、柳は綠の芽をふきます、花は美くしく紅に咲きます。この花の紅、柳の綠は何人が染めるか、どうも染める人はないやうであります。處が春が來れば毎年柳は綠、花は紅に咲いてゐる、これを歌に詠んでゐるのがあります。

染め出だす人はなけれど春來れば
柳はみどり花はくれなゐ

この古人の歌は結構な歌でありますが、私はこの歌をもつと考へて見る、そして鳴滸がましいがこの歌を

染め出だす神あればこそ春來れば
　　柳はみどり花はくれなゐ

と斯う作りかへて見たい。これを染め出だす大きな、絶大な力を認めなければならぬ、これ即ち神樣と思ふのであります。

一昨々年でありましたか、廣島の文理科大學の學生達にお話しをする爲め參りました。大變熱心に聽いて呉れましたので、思はず三時間餘の長い話しをしました。その翌日も亦教會所で話しをしました處、二三名の學生がその方にも來て聽いて呉れました、その中の一人が後で申しますのには「實は私は此處の高等師範部を出まして、地方の師範學校の教諭になつてゐましたが、今回母校が昇格して大學になりましたので、又思ひ切つてもう一度本式の學問を研究する考へで來たのでありますが、私の學問の專攻の科學は植物學であります、これ迄一介の學究として、植物學を專攻する爲め研究を始めた、今二年間教授の指導の下に研究してゐる、處が研究をすればする程、この植物と云ふもの……草木といふものには誠に精密な、そして恐るべき嚴格な方式が行はれてゐることに、實にどうも何とも言へない感に打たれてゐる。その種が土に落ちる、その土壤……土地の關係、肥料の關係、季節關係、然ういふものを綜合して考察すると、精密に調べればしらべるほど、誠に嚴格な、誠に明瞭な、的確なる方式が茲に現はれるのです。私は最初植物學といふものを專攻したのであります、今もしつゝあるのでありますが、近來は科學者として立つと云ふ志望を捨てゝ、この大天地の間に橫たはる、この方式の根源たる「神」といふものが研究して見たい、宗教に一身を投じたいと迄考へてゐる」と、かう申した學生がありました。熱誠面に溢れ、私も大變に感激したのであります。

だから學問を本當に研究すればする程、そこに何か人間以上の絶大なる力を認めざるを得ない、これは科學の純眞なる研究者の等しく感じてゐる處であります。

（五）

只今は日本のことに就いて申上げましたが、御承知のアインシュタインと云ふ世界一流の大學者があります。ナチスの爲めにドイツを追はれて亡命し、アメリカに只今行つてをります。世界一流の大學者で、相對性原理と云ふ難かしいことを發見した人でありますが、このアインシュタインが言つてをります、「今日の我々の幼稚な天文學の知識をもつてしても、この天地の間に我が太陽の如き恒星……自から光りを放つ星が少くとも百億ある、それに附屬した星、これを加へれば千億の星がある、それほど多くの天体――我が地球もその一つでありますが、――それだけ多くの而かも大きな天体が默々として、こつとりとも言はず、運行を續けてゐるが、どこにも支障を生じない、そして少しの間違も生じないこの超絶的な事實を考へる時、どうしてもそこに神樣と云ふことを考へなければならぬ」とアインシュタインは申して居るのであります。

尚ほ彼は言つてをります。「天体に百億の恒星ありと考へる、これも一大不思議でありますが、更に手近のことを考へますと、――人間の腦髓、俗に言ふ腦味噌、その腦髓の中で色々ものを考へる部分を大腦と申しますが、これがどういふ風に出來てゐるかと申しますと、小さな細胞と云ふ生き物が澤山に集まつてゐる、生き物が集まつてゐるその數が約百億、顯微鏡で見れば小さい獨立の生き物であります。その百億といふ多數のものが集まつて大腦を組織してゐる、處が大腦がものを考へる時、決して百億がバラ〳〵に分れない今日はどこへ遊びに行かうといふやうな時、チヤンと一つに決定する、むつかしい事を判斷する時でも下す裁斷は一つである。夫れ〳〵獨立の生き物が百億も集まつて大腦を組織し、そして一つの判斷を下す、茲にもどうしても今日の學問では說明することの出來ない大きな不思議の存することを考へると、矢張りそこに神樣といふことを考へなければ、どうしても他に說明の方法がない」と云ふてをるのであります。我々宗教家が言ふのではない、世界一流の大學者、アインシュタインといふ人が言つてをるのであります。

英國のジーンスといふ、これは天文學者でありますが、この人の言つてゐる言葉に「天文

學上、この天体の構造、運行、これをちつと考へると、どうも誠に正確な立派な數學的設計者が存するやうに思はれる」と言ふてゐる。此處のこの立派な講堂の建設に就いては、大變頭の勝れた專門の設計者に依つて設計され、その設計圖通りに、きちんと建築されてこの立派な講堂は出來たのであります。處がこの何億万倍か果しのない絶大なる大宇宙の組織が、きちんと組織的に出來てゐる、このもとを設計した人を思はずには居られない、これは何人であるか？ 何樣の仕業であるか、そこに神樣と云ふことが當然我々の頭に浮かんで來ると申してをるのであります。

だから中途半端な、學問や研究で簡單に神等はない、そんなことは古人の迷信だと言つてゐるものは、大變氣の毒な淺薄な考へ方をする人でありますと共に、眞面目に考へる時一大學教授、大學生、世界一流の大家が等しく何等かの不思議な絶大な力、言ひ換へれば神樣と云ふことを考へてをるのであります。これがほんとうであります。そこに科學と宗敎が一致するのであります。

先般日本に來まして畏れ多くも勳章を頂戴致しました、これも世界一流の物理學者であります、名前は一寸忘れました、なんでもニールス、ボーアと言つたと思ひます――デンマークの學者でありますが、その學者が「我々が物理學者として物理學の原理を色々研究する、處が今日の最高の物理學に於いても、その奧にどうしても說明の出來ない不思議が存する」と云ふことを明言してゐる、その不思議は即ち神樣ではないかと我々から申し上げたいのであります。

（六）

由來人間は眼前に色々なものを見てをりますが、學問が進んで遂にその中から元素と云ふものが發見されるに至りました。古人は、水といふものは變らない故に一つの元素だと見て――「地水火風」の「四大」などゝ云つて、これを萬物の根元だと思つたのです。所が恰度我々が小學校や中學校に學んだ時分には、近代の西洋の科學で、水そのものは元素ではなく、酸素と水素、この二つの元素が集まつて、化合して出來たもの、だから水は水

素と酸素に變つて來るが、その水素と酸素と云ふものは永遠に不滅であり不變である、決して變らないものである、天地萬物は概略八十幾種、或は九十幾種の元素から出來てゐると教はつたのでありますが、處がその後學問が急速に進歩致しまして、その元素といふものを更にもう一つ元に戻して見ると、凡ゆるものが電子になつてしまふ。水素も酸素も同じ電子である、唯だ陰電子の數が違ふと云ふのであります。天地萬物は電子から成立すると云ふに至つたのであります。而してその電子といふものは、一ミリメートルの何億分の一といふ、とても我々の想像も附かぬ小さなものであつて、どんな精巧な顯微鏡でも見つけることが出來ないと言はれ、玆まで來れば殆んど物質ではなく、最早電子は一つのエネルギーであり、力である、これは力であつて、非物質である。電子が集まつて來ますといろ〳〵の物質となり、山ともなり、川ともなり――山川草木から大は天体ともなるのであつて、そこに説明の出來ない點に到達する、この絶大なる不思議に向つて、お互にもつと眞摯に考へたいのであります。――こゝに至つては何人も唯偉大なるかな神樣と考へなければならぬと思ひます。

だから、一面には精緻なる科學の研究から天地の嚴然たる不變の方則、眞理に到達してそこにその由つて來たる神秘の力、端的に云つて「神」を發明しまするが、又た趣を異にして科學で一切を説明しやうとしても、その窮極迄行けば全然説明の出來ないものがあつて、玆に宗教の世界には入つて、神の不思議なる力と云ふものに到達するのであります。かくて、科學者は必らず宗教の境地に迄進められ、宗教家は科學者の正式研究に依つて直接我々の信じてゐる處の間違ひでなかつたことを證明する、最早科學は決して宗教の敵にあらず、宗教の爲めに忠僕として働らいて呉れるものであるといふことを感謝してゐるのであります。唯だ科學が絶大なる努力で研究し、精進し、何百年或は何千年にして漸く到達し得る處を、偉大なる宗教家は直感に依つて悟つて來た。古人が悟りを開くと云ふのはこれであります。佛教の言葉に「一起直入」と云ふのがあります。超理的に直ぐに飛び込む、本体の世界、神の世界に直ぐに飛び込む、そこに宗教の意義があると考へます。天地

萬物一切が等しく電子である、一つものから出來てゐる、これは恰度宗教の方で「天地一体萬物同根」と言つて、この天地一切凡ゆるものが一ッ根から出來てゐると申すのと一致してゐます。――今日の科學がその通り相違ありませんと精密な方法に依つて證明して呉れてゐる、誠に有難いことゝ思ひます。宗教を助ける科學、科學に依つて證明せられる宗教、――宗教も科學に依つて證明される、斯うならなければ意義がないのであります。

（七）

處で精神と云ふ方面、この方面は科學者に閑却され易い處でありますが、これ等の各種研究を爲すことも科學者の使命であります。若し間違つた科學者流になると、どうなりますか、これは或る雜誌に書いてあつたのですが、――お互人間が萬物の靈長と誇つてゐても、これを唯物的に、物質の方から見れば、我々人間の身体を色々分析して見ますと、どういふものがそこに殘るか、博覽會の廣告等に舞ひ上らせてゐる短氣球――アドバルン、あの中に入れてある水素、小さな氣球の一個の量の水素瓦斯、それから蠟燭にするやうな脂肪が日本の目方で一貫四、五百匁、尤もこれは西洋人が標準でありまして、体重二十貫ばかりの西洋人に就いて云ふのであります。そして色々なものを食ふて出來た糖分があるそれが一体どの位あるかと申しますと、コーヒー等に入れます角砂糖五十個ばかり、次に鐵分がある。――金の鐵……この鐵分が人体から減ると顏色が大變蒼白くなつて、醫者が鐵劑を呉れる、よく鐵分を攝れ等と言ひます、この鐵分がどれだけあるかと云ふと五寸釘七本ばかりの鐵分。――それから塩分……小匙に二十ばい位ひの塩分がある。――人間の身体からはこれ等のものが取れますが、これを時價に換算して見ると、約三十圓ばかりのものがあるといふことであります。尤もこれは二十貫もある西洋人の身体からで、日本人特に私は瘦せてをりまして、その六掛ほどしかありませんので、三六、十八圓、せい〳〵二十圓と云ふことになります。此處で色々理屈を説いて……大きな聲で理屈を並べて居つても、それを物質的に考へれば漸く二十圓の相場のものであります。近來鐵の相場が上つてをりますので、多少値が上るかも知れませんが、それにしても五寸釘七本ばかりの鐵で

すから値が出てもたかゞ知れてゐます。結局二十圓ばかりのものであります。

然ういふことを言つてゐる科學者がありますが、それで滿足が出來るでせうか、如何に科學の眞理でも、これで滿足は出來ないでせう。世界一流の學者、天地の眞理を發見したと威張つてゐる科學者自身が、第一、此の純唯物的の考へかたには、ほんとうに滿足は出來ないだらうと思ひます。だからその點から考へても、これは人類に許されざる考へ方であることは明らかであります。

處でこれも同樣な一つの笑話でありますが、――然ういふ物質的に考へますと、何事も隨分變なものになるのであります。或る理學者が自分の友人、道德、宗教など云ふ精神方面に重きをおいてゐる一友人から、人間の涙といふものは大變に尊いもので、所謂眞心から溢れ出る涙は尊い、殊に母性愛……母親が子供に對する愛情、それから流れ出る母親の涙といふものは、大變貴重なもので、如何なる間ちがつた子供の心をも改心せしむる力がある、と云ふことを聽かされた。それでその理學者は、母親の涙には何か變つた成分があるのだらうかと思つて、何時か實驗しやうと思つてゐた處、たま〳〵何かの機會に母親が涙を流した、で「お母さん待つて下さい」と、皿か何かにその涙を受けて實驗室に入つてそれを調べて見た處が、矢張り九十七八パーセントの水と、二三パーセントの少々の鹽氣があつたゞけで、母親の涙も別に變つた貴いものではないと言つたといふことであります。これは作り話しらしいが、實話だと云ふ事です。

處が事實に於いて本當に母親の愛情から出て來る涙は、どんな道樂息子も、如何なる不良少年をも悔悟させる力をもつてをるのでありまして、然ういふ話しは澤山にある。本當に母親の愛情から出る涙は尊いものでありますが、併しこれは精神的のものであつて、物質的なその成分といふものは、煙やほこりが眼にはいつた爲に出る涙も同じであつて、別にその中に黃金を含んでゐるから尊いといふのではないのであります。

これは大變間違つた科學者の態度を笑つたのでありますが、宗教家の方にも決してこれと同じ程度な、然ういふ間違がないとは言へないのであります。そこで矢張りこれは兩々

相助けると云ふ、本當に正しき宗教、權威ある宗教ならば、科學の進歩を無視せず、科學の眞理を包容して、而もその科學を踏まへてその上に立つ、卽ち科學の上に乘つた超理的眞理、一段と高く世の常の眞理の上に立つものでなければならないと斷言致します。

（八）

英國のロックと云ふ學者もこれと同じことを言つてゐる、「二二が四と言へばこれは「合理」である、二二が五と言へば、「背理」であります。この「合理」と「背理」では勿論合理が良いが、併しこの合理背理を越えた上に「超理」なるものが存する、それが哲學の研究題目であり、そこに宗教と云ふもの丶存在が許される」と言つてゐる。決して理屈攻め、科學の眞理攻めでは解けないものがある。この科學的合理と背理、そんなものを越えた一段と高い超理、而かも合理的眞理を從へて立つ超理、これがほんとうの宗教と言はなければならぬのであります。

そこでこの科學的眞理に準據しながら、更にこれを統制するに宗教的超理をもつてし、かくて、人間の日常生活、將た又國家社會を治めるに、それに由つて行く、卽ち一切の事に關する指導原理をそこに持つて行かなければならぬといふ――これが私が今日お話しする「科學と宗教の一致」といふこの題目の主要點なのであります。

例へば國家と云ふものが存在してゐる。外國といふものがあれば、何時戰爭が勃發しないとも保せられない。これに就いて偏狹な頑冥な宗教的な考へで、敵國には澤山の飛行機がある、我國には無い、併し我國は神國である、外國の飛行機が襲ふて來ても少しも心配はいらぬ、神風が吹く、――然ういふことを言つてをれば、その宗教は國家を誤るものである。

昔蒙古が日本に攻めて來ました。所謂元寇の役でありますが、一夜神風が吹いて九百何十艘の元の船が覆やされてしまつて、十四万九千と云ふ當時の海上の輸送力から云つて、最大限の元の軍勢中、生き殘る者三人と云ふ程全滅したのであります。これは神風が吹いて敵を全滅させたのに違ひありませんが、併し今日の專門の戰術家が驚ろいてゐるのは、

北條時宗の偉大なる人物であつたことであります。蒙古の使を斬つた、從つて蒙古が攻めて來る、元寇來を察して、九州、四國の諸侯に命令して、決して元がどれ丈けの大軍をもつて攻めて來ても、敗けないだけの準備をしてをつた、神風が吹かなくても、日本は決して敗けなかつた、これは今日の陸軍や海軍の專門家が保障してゐるのであります。そこ迄來たから神風が吹いたのであります。西洋の學者スマイルスと云ふ人が、「天は自から助くる者を助く」と言つてをります。自から助ける……自力で助かる爲めに人事の限りを盡して努力する、その結果、始めて天の助けが下るのであります。これは全く本當である。

あの當時この事を歌にしてをります。

もの丶ふの力の限り盡してし
のちこそ吹かめ伊勢の神風

對戰の準備もせず、唯漫然と神風が吹くからい丶、そんなことを當にしてゐては、神風は吹かない。元の軍に敗けない丈けの一生懸命、力の限り盡した、――自から助けるものを天が助ける、――茲に尊い神風が吹いたのであります。「もの丶ふの力の限り盡してし後こそ吹かめ伊勢の神風」であります。これが眞理であります。科學の力と宗敎の力の合致――科學で出來る限りの力を盡したその上に、神の力が現はれて來るのであります。

（九）

處がこれと反對の現象があります。嘉永六年にアメリカのペルリが浦賀に來た、僅か四隻の蒸汽船を率ゐて來たのでありますが、當時日本の文化は非常に遲れてゐて、日本には西洋の蒸汽船に匹敵する船は一隻もない、サア大變だと大騷ぎになつた。處がこの當時の江戸の空氣はどうであつたかと申しますと、「何もそんなに心配することはない、日本は神國だ、今に見よ、神風が吹いて浦賀の沖に威張つてゐる四隻の蒸汽船をひつくり返してしまふ、心配はない、我に神風がある」と言つてゐた。處が待つても待つても神風は吹かない、ペルリは益々強硬な談判をしますが、・・・とんと神風は吹かない、向ふは傲然と構へて益々日本に壓迫を加へる。當時この事實を諷刺した狂歌があります。

當時の武士は旗本を始めとし、多くの連中は皆戰爭などゝ云ふことは、少しも考へてゐなかつた。泰平の夢を貪ぼつて、何等戰爭の準備も、武器の用意等もしてゐない、全くどうも士として、軍人としては何等の素養もなくなつてゐたのであります。だからスワ浦賀にアメリカの軍艦が來た、これは大變と云ふので、陣羽織の用意をしなければならぬ、陣羽織を筥から出して、洗ひ張りをしやうにも餘り虫が食ふてどうにもならなかつたといふ有樣です。全く準備をしてゐなかつた。

之れを皮肉つた落首に、「陣羽織唐人が來て洗ひ張りかへして見ればウラが騒動「浦賀」と「裏が」とをもじつたのであります。然ういふ有樣でありますから、神風が吹かないのも當然であります。これをまた狂歌に詠んだものです。――老中筆頭が阿部伊勢守、これをもじつたもので

古への蒙古の時とあべこべで
ちつとも吹かぬ伊勢のかみ風

と言つて、阿部伊勢守を惡く言つてをりますが、決して然う云ふ時には神風は吹かない、然ういふ考へで神風を期待することは間違ひであります。

尚一層甚だしい宗教上の間違ひは、昔バビロンがエヂプトを攻めたが、エヂプトも仲々頑强に抵抗して征伐することが出來ない。處がエヂプトの國民は大變迷信的で、毎日お祭り騒ぎをしてゐる、而かも猫を大變神聖なものにして、猫は神樣の御使ひだと云ふて、猫を大事にする。それでバビロン軍は、猫を先頭にして進んだ、エヂプト軍では、猫を討つことは出來ないと言ふて、戰爭をしなかつたので、大敗けに敗けたといふのであります。

まだひどいのは、ユダヤは安息日と言つて、一週に一日休む、只今の日曜はそれから起つてをりますが、昔には土曜日を安息日として、何の仕事も休んでぢつとしてゐる。或る時外國が、ユダヤを攻めたが仲々落ちない、そこで安息日に攻めた處が、ユダヤは敵を前にしても、今日は安息日だ、手を動かしてはいけない、足を動かしてはいけないと言つて遂に打敗かされて了つた。力の限りを盡して自から努力する、その後にこそ伊勢の神風が

吹く、天の助けがあるが、宗教もかう間違つて來てはかなはぬ、拱手して敵の蹂躙にまかす、さうして敗けてしまつたといふ。まことにつまらぬ事であります。

これ等は科學を基礎としない、全然科學的な考へを無視した宗教の間違ひであります。

お互に戰爭のないことを希望します。殊に宗教は四海同胞で、世界中が兄弟である、どうか戰爭のないことを期したいと、着々その方面の運動をすゝめてをる次第でありますが、今の所なか〳〵完全に戰爭を絶滅することは出來ない。ですから敵の國には澤山の飛行機があつて、日本には一台の飛行機もないと云ふ樣な場合には、直ぐに日本に攻めて來るのでありますから、それ丈けの用意は戰爭を豫防するためにも必要で、敵に敗けないだけの科學的の準備は常にしなければならぬのであります。その上で始めて我々の正しき祈りに應じて神風の護りがあるのであります。

(十)

日露戰爭の時の日本軍の總參謀、兒玉大將は一世の智將でありました。大變頭が精密でその作戰計畫は並ぶものがないと言はれてをりました。大變に苦心されて奉天附近大會戰のあの大規模の作戰計畫を樹てられた。處が、大會戰中、毎早朝兒玉大將の行方が判らんどこへ行かれたかわからぬ。或る朝フト氣づくと、本營から大分離れた處に大きな木がある、その木を後ろにして東に向つて……太陽に向つて一生懸命に拜んでをられる大將の姿を發見した。「此處においでになりますか」と云ふと、大將はしみ〳〵と述懷されました。

「今度の戰爭にはどうしても勝たなければならぬ、それ丈けの作戰計畫はしてゐる。我々の頭で出來る限り、人事の限りを盡して萬遺漏なきを期した、今はその結果を待つのみとなつてゐる。だからこれで敗けても致し方がないが、併しどうしても敗けてはならぬ戰爭である、そこでこの凡ゆる人事の限りを盡した上は、頼むは唯神樣の力あるのみである。人間の頭腦に於いて、人間の力に於いて出來る丈けの戰備をした。この上は唯だ神樣のお力を借りるより外はない――だから今迄多く拜んだこともない、拜み方も知らないが、唯東の山の端に煌々と輝やき出づる太陽――之れに對すれば、何んとなく強き力を感ずる。

その太陽の方に向つて懸命のお祈りを捧げてゐたのだ」と斯う申された。これ程に力の限りを盡されて、その上にこの懸命の祈りである、神の助けがいかでないことがありませう?――會戰が始まつて十日間も戰況は一勝一敗、我々國民も大變に心配をしました。どうなることかと思ふてゐた處が、最後に敵が愈々總退却を始めるに至つた日の一戰に於て、眞に如何なる人も神の威力といふものを考へねばならない程の「神風」が吹いたのであります。

滿洲は普通北風が吹いてゐるのでありますが、この日に南風が、而かも路傍の柳の木の大きな幹をねぢるといふほどの猛烈な南風が、土砂を吹きまくつたのです。土地は乾いてゐる上に戰爭と來て黃塵が盛んに立つ、それが南に向つてゐる敵に吹き附けるので、敵軍は砂煙の爲め、目を明けて大砲を撃つことも、鐵砲を撃つことも出來ない、それに對して日本軍が、風に乘じて進擊して行たので、遂に敵軍は總退却し、一擧奉天に乘り込むと云ふ程大捷を博したのであります。全くこれは神風であらうと今更の樣に言はれたのであります。

兒玉大將以下我が忠勇なる多くの將士が、ほんとうに人智を盡し、人力を盡くして一生懸命な計畫を樹てた、万遺漏なきを期してゐる、併しこれはどうしても勝たねばならぬ戰爭である。どうか是非勝たして下さいと神に祈つた、茲に神風が吹いたのであります。眞に「ものゝふの力の限り盡してし後こそ吹かめ伊勢の神風」であると考へられるのであります。

(二)

同じ日露戰爭に於いて日本海海戰に東郷元帥は「皇國の興廢此の一戰に在り各員一層奮勵努力せよ」の信號を掲げられた。全く皇國の興廢この一戰にあつたので、各員に人事の限りを盡せと言はれましたが、元帥は又大變に信仰家でありまして、大本營への大少の戰況報告に絕えず「天祐」と云ふ言葉を使つてをられる、天の助けといふのであります。我忠勇なる將士の力、その働らきの重んずべきは云ふ迄もないが、更にもつと尊いものは天

の祐けである、だから戰ひが終つて凱旋、東京灣の大觀艦式に參列の爲め、艦隊を率ゐて東上の途中、伊勢灣に入つて第一に　皇太神宮に參拜して、その凱旋報告をされたのであります。斯くの如き信仰であつた麾下將兵の力の限りの奮闘、その上に神の加護を乞はれたのであります。科學的に力を盡くして努力し、その上に神の力の加護を祈る、茲に必らず神は加護して下さるのであります。

目に見えぬ神の心に通ふこそ
人の心の誠なりけれ

茲にほんとうに科學と宗教の一致したその所に、絶大なる神秘の力が現はれて來るのであります。かゝる祈りを神樣は必らずお受け下さると言ふことを申したのであります。

明治天皇樣の、あの四十五年の御治政、日本歷史のみならず、西洋史を繙いても、東洋の凡ゆる國の歷史を見ても、決して斯樣な麗はしき大御代はないのであります。その四十五年の輝く明治天皇の大御代が、どうして現はれて來たかと申しますと、畏　くも　天皇の御勵精、國の爲めにお盡し遊ばされたと云ふことも勿論でありますが、　陛下には御日常絶えず眞心罩めて　天照大神を御祈り遊ばされたのであります。伊勢の大神を御祈り遊ばされた御製がございます。

とこしへに民安かれと祈るなる
我が世をまもれ伊勢の大神

と御製遊ばされてをります。唯だ〳〵民安かれ――永久に國靖かれ、どうか國民が安定した生活をする樣に――と御祈り遊ばされる、この國、この社會がどうか安らかによく治まる樣に、我が御代を御護つて下されと、　皇祖大御神に、　御自身　眞心を罩めて御祈り遊ばされた。これが「とこしへに民安かれと祈るなる我が世を守れ伊勢の大神」の御製に現はれてをるのであります。この　大御心に依つて茲に世界文明に曾て比類のない明治の聖代、四十五年のあの聖代が現はれたものと私共信じてゐるのであります。茲に信仰の力、祈りの力を認めざるを得ないのであります。

（三）

更に個人の生活と云ふことに就いて考へて見ますと、多くの人が金に苦しんでをります。所謂經濟苦、金の問題であります。この金の問題が一つ、次に病氣、生き死にの問題が一つ、此の二つの問題に永遠に惱まされてをるのでありますが、これを救ふのが宗教の使命であります。先づ經濟のことに就いて申上げますと、着たいものを着て、食いたいものを食ふて金錢等のことは考へないで、いゝ加減の生活をしてゐると、當然財政は行詰まる。而かも仕事も眞面目にせずに、神樣が何とかして下さると、神樣のみを當にしてゐる、これは恰度、科學的に言つて拾圓の金がある、内八圓を使へば殘りは二圓であります。十圓引く八圓は二圓で、科學的に當然の答へであります。これを八圓使つても五圓殘るやうにして下さいと云ふ、こんなことを神樣にお願ひしても、それは神樣でも致し方がないのと同樣であります。

五十圓の給料を取つてゐる者が、六十圓の生活をすると、月に十圓は赤字で、そこに借金が出來る、無理をする遂に不正なこともするやうになる、大晦日には非常に難儀をしなければならぬ、而かも一夜明くれば太平樂で酒を飲む、これではいけません。或る人が作つた、これは大變嫌な俳句、藝術味のない俳句ですが

元日も許さぬ金の利息哉

大變嫌な句でありますが、その通りで借金してをれば、銀行から利子を取られる、若し高利貸からでも借つてゐると大變な高い利息を取られる、元日だからと言つて用捨はない。然るにいろ／＼苦しんだ大晦日も一夜明くれば元日だと、至つて朗らかになる。朗らかは良いが矢張りその年にも大晦日はある、三百六十五日したら必らず來るのであります。辛抱もしないで斯ういふことをすれば、益々困る樣になるのは科學的に考へて當然であります。

元日や今年もあるぞ大晦日

だから入るをはかつて、出づるを制する、これ丈け收入があるから、その收入内のざれ丈

けの生活をする、これが經濟生活であり、所謂豫算生活であります。文明人の生活はこれでなければならぬ。唯いゝ加減なことをして神樣が何とかして下さる、そんな考へではいけない。

併も徒らに心配してもいけない、出來るだけ儉約し、辛抱し、その上で色々なことが出て來る、なれば致し方がない、これは天に任せなければならぬ。如何なる時でも惡いことばかりが續くものではない、又幸いなこともあるのであります。この信念が出來ないならば本當の生活ではない。

常に何事も兩面的に考へなければならぬ――何でも儉約をする、金を蓄める、極端に吝嗇で近所の人にも嫌な感じを與へ、近所の人、町内の人、社會の人と疎遠した生活をすると、その方面から惡い結果になるのであります、科學に於て因果の法則は歴然として居りますが――善因には善果があり、惡因には惡果がある、この道德的因果法則も、科學の法則と同樣に至つて適確なものであると考へなければならぬ、古人も

積善の家には餘慶あり
積不善の家には餘殃あり

と言つて居ります。餘慶と云ふのは、餘りの慶びであり、餘殃は餘りの災ひであります。善を積む、良いことを段々と積む、社會、國家の爲め、人の爲めに善を積んだ家には當然來るべき喜びの外に、思はぬ良いことが澤山に酬ひられる、即ち餘慶ありです、處が段々と惡いことを積む、物質經濟のことばかり考へて不善を積むと必らず餘殃がある。意外の災害が數知れず重なるといふ言葉であります。この單なる科學的經濟的の問題を道德的に考へ、更に神樣の御惠み、御働らき、或は御制裁と云ふものを思ひ、信ずる――この宗教的の方面迄考へますと、茲に本當に私共の經濟生活と云ふものが完成するのであります。

この兩面を考へますと、辛抱せず、儉約せず、當然發展すべき準備なくして一生懸命に祈つても駄目であります。神樣は決してそんな祈りを肯いては下さらない。――それは明らかでありますが、たとへ金をつかつても、人のため世の爲、それを豫じめ期待するので

はないが、いつかさうなつて來る。——餘慶であります。

（三）

今度は病氣の方について申上げます。——科學者が、醫者が、お互の身体を唯〻物質的に取扱へばそれは藪醫者であります。これは私共あなた方も御經驗があることゝ存じますが、醫者の態度として愼しまなければならぬ點であります。——大病人を醫者が診る、脈を診る、小首を傾けたり、大變に心配さうな顏をすると、その病人は大變に惡くなつて來るのであります。

曾つて私の隣家の若い夫人が病氣をしてゐました。大分病勢も進んでおりましたが、急に死ぬるほどの病氣でもなかつたのに、醫者に診て貰つてから、急に大變惡くなつたと言ふので行つて見ました。やがて少しおちついて來たので、一体どうして俄かにそんなに惡くなつたのかと、だん〱訊いて見ますと、「今日お醫者さんが首を傾むけて大變心配さうな顏をして診察されました。で、もうこれはいけないのだらうと思ひました」すると俄かに苦しくなつたのだと云ふことでした。それで私は「あなたは醫者に診察して貰つてゐるので、あなたが醫者の顏を診察してはいけません」と言つて笑つた事でしたが、大病人等には、斯うした醫者の態度が、大いにその病氣に影響があるもので、これは科學ではない感情でありますが、醫者がそんな顏をすれば、精神的に打擊があつて非常に病氣が惡くなる。これは事實であります。でありますから立派な醫者は、精神的影響を考へて決してそんな表情はしないものであります。

今日は段々と醫學も進みまして、一本の注射に依つて癒る病氣もある。昔は死んでゐた病人が、一本の注射で癒る。然う云ふ治療はどん〱受けて良いのであります。「我々は信仰してゐるから醫者にかゝらない、病氣をしても醫者にかゝらなくても癒る」と言つて醫者にかゝることを嫌ふ、斯ういふ近來の類似宗教は實に科學に挑戰するものであり、かゝる考へ方は、大にしては國家を誤り、小にしては病人を誤るものである、出來るだけ科學の用意をし、人間の力で出來る限りの養生をし、藥も飲む、注射も受ける、出來るだ

けを盡して神の力を祈らなければならぬ。
東郷大將は嘗て部下の青年將校に訓示して「戰場にて勇者であるものは、病氣に對しても勇者でなければならぬ」と言はれたそうで、然らばどういふのが病氣に對する勇者かと訊くと「病氣に罹つた時には、醫者の言ふことをよく守つて、どんなに苦しいことでも醫者の言ふ通りにする、どんなに飲み難い藥でも飲む、それが本當の病氣に對する勇者である」と言はれたといふ。これは眞に名言であります。流石に名將の言であります。

併し、一方今日の醫學は大變進歩したと言つても、實は未だ甚だ幼稚なもので、病氣も多く癒つてをらぬ、も少し病氣を癒して下さいと申上げたい。或る醫學博士がこんなことを言つて居ります。「昔は四百四病と云つたが、今日は何千と云ふ病氣がある、この中で我々の方の藥で必らず癒るといふ特効藥の發見されてゐるものは、僅かに四ッ五ッしかない、それだけは確かであるが、あとの病氣は藥を與へてゐる間に、何時とはなしに快くなる、これは藥の力といふよりも、自然の力で癒るのである、――藥禮は醫者が頂戴してを

るが、病氣は自然が癒して呉れる」と白狀してをる。これはほんとうの事であります。專門の大家が言つてゐるのであります。今少し醫學が進歩して、一本或は數本の注射で、どんな病氣でも癒す、三日か四日藥をのめば、どんな病氣でも癒ると云ふ時代も來るでせうが、今日では未だ病氣を癒すにも、宗教の力を貸してゐるのであります。直接肉体に對しては醫學であり、これを精神的に助けるのが宗教であつて、宗教は心を癒してやる。從つて多くの場合「病は氣から」と心に依つて起る病氣は當然癒るのであります。イヤそれだけではない、――さきに科學的因果律、道德的因果律のことを申しましたが、宗教的因果律もある。神を信ずる、神を尊信する事に對する神力の加被、それも間違ひのない事であります。醫術の方が進んでそれで病氣全部を癒すと云ふのが理想でありますが、如何せん今日の醫術は未だ幼稚でありますから、宗教がその方にも力を貸してゐるのであります。

だから醫學を難じ、醫者にかゝらなくてもいゝと云ふのも間違ひでありますが、併し仲々藥が効かない、慢性の病氣で藥が効かない、難病業病で出來るだけの手當をし、醫者の

手當を受けたが効目がない、もういけない、斯う云ふ愈々といふ場合になれば、元來我々の身体は不可思議なエネルギーである、電子から出來たもので、而もその電子も神の御力の顯はれであります。その絶大な御力を信じ、これに一切をお任せする、斯くしてこの絶大な御力に頼れば如何なる病氣も癒るのであります。古人の歌へる通り「死ぬるもの生かしもせいじや生きもする無き身を造る神の徳なら」であります。これは私共の確信であります。

（四）

現在斯く申上て居る私のことを申しますと、幼少の時から四回も胸の病氣をしました。最後は三十三才の時に襲はれましたが、これが宗教の力に依つて全快したのであります、幼少から弱かつたので、醫者は三十以上は生きられないと斷言してをつたのでありますが、その最後の病氣の時などは、とても衰弱して全く肉はなくなつて、骨と皮で、檢溫器を自分の指でさしあげて見るだけの力もない程、衰弱してをつたのでありますが、それが不思議に快くなつて、今申しました樣に醫者に三十才以上は生きられないと言はれた私が、本年は還暦の六十一才を迎へてをります。

而も、最後のおかげを受けて以來二十七年間の長い間、唯の一度も病氣で寢たことがない、これは精神の力と申しませうか、イヤ、決して私の力ではない、一切の根源であらせ給ふ　大御神樣の御力であります。天地を主宰し給ふ御力に頼れば、これ位いは當然の事であります。肋膜から肺病とたびたび患つたものが全く快癒して、このどこから出るかと云ふ樣な大きな聲をもつて、長い間話しをして少しも苦しくない、全く自分の力ではない。醫師は三十迄に死ぬと言つた、それ程虛弱な者がその倍以上も斯うして生きてゐる、茲に全く「不思議」と云ふものがある。――「妙」がある。

日蓮上人は、釋尊の教說は法華經の一部に盡きる、法華經の神髓は「妙法」の二字、更に詮じつめれば「妙」の一字に盡きると云はれた。一切は全く「妙」の一字に歸するのであります。黒住教祖も「これ皆天地の妙なり」と言はれてをります。この「妙」を信ずる

のが信仰であつて、これは科學の力で到底解けない、科學を越えた超理であります。この超理の力が病氣も支配するのであります。

さて、祈りに就いて、これを經濟上から言つても、又た病理上から申しましても、酒を飲む、不攝生をする、そこで金にも困り、不健康にもなつて病氣をする。――こんな場合にどうか經濟的な窮乏を救つて下さい、どうか病氣を癒して下さいと祈るが、依然としてその窮乏の原因、又は病原を改めない、これでは如何な神樣もお取上げにならないのです。祈ると云ふこと、これを我國語をもつて解釋すれば、祈りは「齋み宣る」であります。齋は潔齋であります。我々の身体のけがれ、心のけがれを潔齋して、神樣に宣るのであります。宣誓をする、はつきり明瞭に申上げる、潔齋して宣るのであります。だから病樣を忌み宣ると云へば、從來自分が不品行をしてゐた、不攝生をしてゐた、これをやめて潔齋して、間違つてゐた、今後はかゝることは斷じてしません、どうぞお助け下さいと云ふ、これが本當の祈りであつて茲に氣附かれないのは祈りではない、過去のけがれを潔齋して、本當に心から神に誓ふ、この精神、この祈りは必らず聽かれるのであります。黒住教祖は「本体の祈りにて叶はぬ事はなき事なり」と申してをります。本体の正しい潔齋した祈り、本体の、本當の身体も心も忌み清め、間違つた過去を正し、眞心を罩めて神の助けを祈る、この本体の祈りであれば、何でもきかれる、間違ひなく何でもきかれると申されてをるのであります。

天照す神の心に叶ひなば
萬づに成就せざる事なし

と申さざるを得ないのであります。

（五）

段々時間もなくなりますので、最後に申上げたいのは、今日の科學は、先刻も申上げました天文學上の、この太陽系統、これが研究も段々進んで來てをります。この運動も太陽と云ふ一番大きな恒星がありまして、お互の住んでゐる地球の百三十三万倍と云ふ、その

大きな恒星を中心として、その周圍を水星が廻る、次に金星が廻る、三番目に地球が廻り、次が火星と云ふ順で、八大遊星がその中央、中心たる大きさも一番大きな太陽を中心にその周圍を順々に旋廻している、これが太陽系統の組織であります。この中心がしつかりして少しも動かぬ、そして誠に大きな力……引力によつてこれを率ゐてゐる、だから他の天体がこれを廻るに少しの間違ひもない、――我々人間の住む地球は、小さな遊星でありますが、それでも日本の里程で一萬里の周圍をもつてゐて、現にこの地球の上に太平洋も乗つてをり、ヒマラヤ山も乗つてゐる。この大きな地球が太陽の周圍を一と廻りする。これを一年と申しますが、三百六十五日と五時間四十八分四十六秒二十分の五とか云ふ精密な時間が少しも違はない。人間の作つた色々な機械……汽車などがあれ程正確だと言つても一分一秒も違はないといふ風にはゆきませぬ。處がこの大きな地球が、太陽の周圍を廻る、何遍廻つても半秒の違ひもないのであります。それが年々歳々何千萬年の昔から、この後何億萬年の後に亘つて、曾つて一回も違はない、三百六十五日とその端が五時間四十八分四十六秒二十分の幾らといふ程、精密な時間で運行してゐる、この驚ろくべき偉大な力と云ふものを誰しも認めなければならぬ。これには中央に、中心に太陽と云ふ不動の……動かない中心があつて、大きな中心があつて・・・そこに太陽系統と云ふ整然たる組織を成就してゐるのであります。

處が一方小さい方から申しますと、先刻申上げました原子であります。一センチの何億分の一と云ふ小さいものでありますが、これもよく見ると、・・・中央に中心に陽の電子があつて、陰の電子がずつとそれを廻つてゐる。酸素原子だと、恰度太陽系統の一大天体界の樣に陽の電子一つ、それを八つの陰電子が廻つてゐる、即ち太陽系統の八大遊星と通じて、茲に小さい天体が存在する。大は直經五十億万哩もある太陽系統の天体から、小は一センチの何億分の一の直徑しか持たぬ原子と共に中央に中心があつて、その周圍を附屬分子が旋廻してゐる。實に天地の妙に驚ろくのであります。而して何に依つてこれが整理されてゐるかと申しますと、これ即ち中心の力であります。中心があつて一切が組織される。

この組織は日本の神道で申す「ムスビ」であります。「神結」と申します――文字では「產靈」と書いて「ムスビ」と讀ませます。物を產み出だす、不思議な力、その神格を「ムスビノカミ」とも申します。――この神結びに依つて總てのものが結ばれてゐる、一つの中心があつてその中心に一切のものが結び附き一つの結合を成してをるのであります。

(六)

これを國家といふものに就いて申しましても、必らず大きな中心がある。動かざる處の動かすことの出來ない萬古不易の中心がなければならぬ。これがなければ、………不變の中心がなければ、その結成は必らず完全でないのであります。世界の多くの國が、或は三百年或は五百年、甚だしきは二十年、三十年で亡んでをります。どうして然ういふ結果になるかを顧みますと、何れもこの中心の位、中央の重點になる中心が暫定的である、一時的のものであるから然う云ふことになる。

處が獨り日本のみは萬世一系と仰せになつてゐる。天壤無窮と仰せになつてゐる。天壤無窮、天地と共にこの位は榮えると　天照大御神樣が仰せになつてゐる。萬世一系の　天皇　この動かざる處の　天皇が中心にお在す、始何なる場合にも斷じて動かざる、如何なる時でも斷じて變らざる大中心があつて、茲に日本と云ふ國が出來てゐるのであります。この事實を忘れてはならぬ。これは決して西洋或は東洋の諸國に於いて見ることが出來ない、獨り日本に於てのみ見ることの出來る天地の正理の現はれであります。而して神代の時代から今日に至る迄多々益々彌榮に榮えてをるのであります。この眞理を日本國民として忘れてはならぬ。「天照す神と皇との一系を忘れ給ふな人の心に」であります。

これは科學の敎ふる、一切に中心があつて結成されてゐる。そして存在すると云ふ、その儘が日本の機構に現存してゐる。その科學の眞理が………天地の正理といふものが、日本に現はれてゐるのでありまして、何んとも云へぬ尊嚴とありがたさとを感ずるのであります。

而も、御承知の如く、これは偶然にさうなつたのではなく、我が皇祖　天照大御神樣が

皇孫瓊々杵尊を此の國土に降し給へる時の御神勅に「豐葦原の千五百秋の瑞穂の國は、これ吾が子孫の王とますべき地なり」——豐葦原の瑞穂の國は、吾が子孫のみの　天皇となるべき國である、斷じて、他の者が皇位に上ることは出來ない、皇位に即くことは出來ない。と、かくお定めになつたのであります。これが萬世一系と申すのであります。

さて次に「寶祚の隆えまさんこと當に天壤と共に窮りなかるべし」と仰せになつてゐる。この　天皇の御位、皇室の隆盛は天地と共に永遠に無限に榮ゆるものであると仰せになつてゐる。これは建國の第一歩に於いて斯く決してをり、その通り今日なつてゐる。今後も天壤無窮萬世一系、彌榮であります。東洋の一小島日本は世界一の國となつた。そして今や全世界は、日本を中心にして更に大きな「結び」を完成せんとしてゐる、——世界悉く　天照大御神の御神勅に依つて　天照大御神の御神孫にまします我が　天皇を中心に結ぶ、世界を擧げて神國日本に取り結ぶ。——これは科學の眞理と合致する神の正理、「神理」であります。

黒住教祖の教へは、主としてその「神理」を說いたもので、あらゆる人々、あらゆる國々が、　天照大御神を景仰し、讃美し、尊信し奉り、全世界が畏れながら、天照大御神の御神孫にまします我が　天皇陛下を中心に、道義的に一つに結ばれるといふ、これが、黒住教祖の畢生の心願たる「天照大神御開運」の祈りの主旨であります。

(七)

天照す神の御德を世の人に
　殘らず早くしらせたきもの

これは教祖の御歌でありますが、世の人々が眞によく　大御神樣の御神德を知りましたならば、一切の不平は解消し、一切の爭ひは絕えて平和安穩の世の中となります。そしてその　大御神樣の御神孫たる　天皇陛下を　大御神樣御一体の現人神と尊崇しまつつて絕對の忠誠を誓ふ樣になります。

若し御神德を知る事が「世の人」「殘らず」——世界中殘らずと云ふ事になりますれば、

即ち、全世界が確固不動の中心の周圍に集まつて、ほんとうに大きな結びを完成する。これを今の言葉で言へば、「皇道の世界的宣布」と申します。黒住教祖はそれを「天照大神御開運」の御時節到來と申しまして、懸命にその事を祈つたのであります。――かくの如き信念、かくの如き祈り、これが本當の宗教、本當の信仰であります。

宗教もいろ〳〵あり、教義もいろ〳〵に說かれておりますが、それはそれでいゝのでして、いろ〳〵の說きかたのあるべきですが、併し所謂「祭政一致」で宗教と政治の問題が當然一致して來る時、一切の中心は必らず天照大神に歸着すべきであります。國家の中心、政治の中心、一切の中心に立たせ給ふのは、唯 天照大御神――その御神孫たる 天皇陛下がお在すのみであります。

近來類似宗教等の間違ひの本は、この中心が 天照大神にあらずして他にある、その中心が天皇にあらずして他にある、――教へを說く人、自らを絕對者なるかの樣に考へたり、人々に考へさせたりする、そこに根本の間違ひが生じてゐたのであると思ひます。一

切の中心となつて支配される御方は、唯 天照大神――その御神孫にまします 天皇陛下がお在すのみであります。一切が 天照大神に依つて統一される――この信念、この思想、これが宗教の本當の信仰、本當の思想であると思ふのであります。

一昨年教化刷新評議會の人々が集まり將來の日本教化の大方針を文部大臣に答申した、それには「天照大神中心の信仰を鼓吹するにある」と云ふてをるのであります。

「天照大神中心の神仰」――さうなつて、そこに始めて一切の間違ひは解消されませう。そこに、日本の誤らぬ正道があり、日本の永遠の眞理があり、更に超理的の信念があるのです。そこに日本の眞の宗教があり、そこに日本の日本たる權威があり、そして、君子國と云はるゝその道義の力に依つて道義的に世界を統一し、神の國を建設し、世界の最高の文明を打ち樹てると云ふ、大日本皇國の大使命があるのであります。――所謂、之れを中外に施して悖らざる底の眞理であります。

これを思ふと、我々の心は誠に感謝に滿ち、歡喜に溢れるのであります。――その感謝

の、歡喜の一端を披瀝して、皆様とその歡びを共にしたいといふ、これが今日の私の話しの眼目であります。

茲に長時間に亘る御清聽を感謝して話しを終る次第であります。

黒住教徳島教會所	徳島市富田弓町二丁目
黒住教佐古教會所	徳島市佐古町九丁目
黒住教中田教會所	徳島縣勝浦郡小松島町中田
黒住教富岡教會所	徳島縣那賀郡富岡町大字富岡
黒住教羽ノ浦教會所	徳島縣那賀郡羽ノ浦町中庄
黒住教大里教會所	徳島縣海部郡川東村大字大里字濱崎
黒住教美馬教會所	徳島縣美馬郡西祖谷山村大字重末
黒住教脇町教會所	徳島縣美馬郡脇町
黒住教舞中島教會所	徳島縣美馬郡三島村大字舞中島
黒住教池田教會所	徳島縣三好郡池田町大字池田
黒住教川崎教會所	徳島縣三好郡三繩村大字川崎
黒住教鴨島教會所	徳島縣麻植郡鴨島町鴨島
黒住教上浦教會所	徳島縣麻植郡牛島村大字上浦字梅市

昭和十二年八月十七日印刷
昭和十二年八月廿五日發行

不許複製

編輯兼發行者　徳島市富田弓町二丁目千五百二番地　渡邊一雄

印刷者　徳島市二軒屋町字本町西四十二番地　中山國義

印刷所　徳島市二軒屋町字本町西四十二番地　中山印刷所

發行所　徳島市富田弓町二丁目　黑住教徳島教會所　振替徳島五七七二番

375
.789

終